

令和四年寅年大特集

十干十二支と虎について

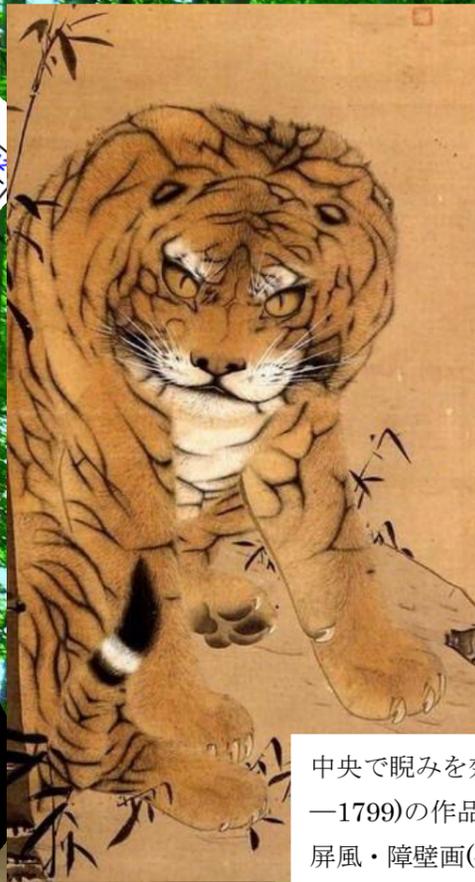
干支(えと)とは、古代中国を発祥とする、時間や方角の数え方。「十干(じゅっかん)」と「十二支(じゅうにし)」の組み合わせにより構成されており、全60項からなります。起源は古く、何と殷墟(最古の中国王朝の殷の廃墟)から出てきた甲骨文字から。現在は十二支のみが取り上げられますが、本来は「十干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)」と組み合わせて使わなければ意味を成さないとのこと。最初期は十二支に動物が当てはめられておらず、いつから始まったかは不明。早くも三国志の時代に「〇年生まれとか言ってるけど、それ何の根拠もないから」などと揶揄されていますが、縁起を担いだとも言われる十二獣はそれはそれで楽しいもの。令和四年は寅年。干支では三番目にあたる年で、方角にすると東北東を表しています。美しく気品に溢れ、しなやかで力強い動きが印象的な虎は、古くから人々の畏怖の対象となっていました。輝くような毛皮から、夜空の星を前身に持つとの言い伝えもあります。そんな寅年生まれの人は正義感が強く情熱的なロマンチスト。ホンマかいな?と思いつつも、そう振る舞ってみたら存外何か得られるものがあるやもしれませんね。

図は「新撰東錦絵 一休地獄太夫之話」。屏風の虎でお馴染み、一休さんと、「一休宗純」と、伝説の遊女と伝えられる「地獄太夫」の出会いを描いたもの。髑髏を掲げて「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」と嘯く一休禅師と「我死なば焼くな埋むな野に捨てて飢えたる犬の腹をこやせよ」と壮絶な辞世を残した地獄太夫を描いたこの画題は人気が高く、多くの絵師がこのテーマを取り上げています。

描いたのは月岡芳年(別名:大蘇芳年 1839-1892)。「最後の浮世絵師」と呼ばれ、幕末から明治にかけて活躍しました。ダイナミックで躍動感ある構図と、グロテスクな表現をも辞さぬ破天荒な画風は江戸川乱歩や三島由紀夫など多くの文人・著名人を魅了しました。



十干十二支 (六十支)											
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌	丁亥
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥



虎とくれば、やはり中島敦の「山月記」を忘れるわけにはいきません。中国古典をモチーフに自意識をこじらせて虎に変じた男の悲劇は明瞭にして硬質な文体と相まって教科書掲載作品の定番となっています。作者・中島敦(1909-1942)はわずか20篇の作品を残し33歳で夭折。「つまらぬ作品を多く残すより、至玉の短編を一つ残した方が良い」と称賛した三島由紀夫の言の是非はともかく、「李陵」「文字禍」「名人伝」といった作品は現在も高い評価を受けています。

中央で睨みを効かせる勇猛な虎は江戸時代の長沢芦雪(1754-1799)の作品。円山応挙の弟子として頭角を現し、襖絵や屏風・障壁画(壁絵の一つ)などを多く手がけました。自由奔放にして大胆、機智に富んだ画風で後年、「奇想の絵師」と呼ばれる才気を持ちながらも性格面では難があったらしく、数々の醜聞と毒殺を囁かれる奇怪な最後を遂げたと伝えられています。とはいえ、「狗子図」の丸まっつく愛らしい仔犬達の姿を見るとそんな悪評などつい忘れてしまいますが。



愛くるしい「狗児図」に負けず劣らず可愛らしいのが長沢芦雪の師、円山応挙(1733-1795)の「狗児図」。「かわいい江戸絵画」として取り上げられ、その弟子達の作品も含めて「モフモフ派」などと呼ばれて人気がありますが、その実、長崎出島からの洋画の手法なども意欲的に取り込んだ多彩な作風で「円山派」の祖として一大勢力を築きあげた一代の雄。「幽霊画」の人としても知られ、応挙の幽霊が絵から抜け出してびっくり、なネタ絵を著名な大蘇芳年が描く程。

